が實物に卽して考說されてゐる等、學術的な立場から傾聽すべき所說を隨所に見出すこと併せ學ぐ可く、大戰下東亞古藝術に關する本邦學徒の精進を示す一標識をなすことが知られるのである。

（朝日新聞社刊・寶價二十三圓五十錢）（岡田芳三郎）

彙報

史學科卒業生と入學生

昨年十一月の學徒出陣に依る卒業生二十七名の外、本年論文を提出して新たに卒業した殘留本學史學科學生は次の十名で、その卒業論文の題目と氏名は次の如くである。

國史專攻　五名

日本上代精神史の一課題　中村二柄

古代經濟生活と神　木村鷲治

中世に於ける法理の性格について　高田弘

鎌倉時代の復古思想　永田常次郎

我が國に於ける淨土宗の成立について——平安佛敎より鎌倉佛敎へ——　和田正之

東洋史專攻　一

元末の亂と社會的勢力　笹本重巳

西洋史專攻　一名

フィヒテの國家觀　秋山博愛

地理學專攻　二名

アメリカ合衆國に於ける人種問題と國民の形成　小糸伸一

亞細亞的鐵鑛業の大東亞的編成　野澤信韶

考古學專攻　一名

繩文土器の起源に就いて　鈴木博司

次に本年度史學科新入學生は本科生五十二名（內專門學校卒業生十名）選科生十名の計六十二名である。

宮崎敎授の任官

東洋史の宮崎助敎授は本年五月十三日附で本學敎授に任官、東洋史第二講座の擔任を命ぜられ、こゝに東洋史陣容が整備を見ることになつた。

國史研究室近況

一、共同研究　日本語學振興委員會昭和十九年度指定研究として西田敎授を中心に中村・藤兩助敎授及び平山助手らは「日本軍學武敎の歷史的研究——國民生活との關聯」なる課題による共同研究を行ふことになつた。

二、見學　西田敎授をはじめ研究室一同は左記の如く見學を行ふところがあつた。七月七日午後市內今熊野の新日吉神社に、社司藤島家所藏の史料を採訪した。同家は非藏人の家格をもち、院の藏人を勤仕してゐて、非藏人座次惣次第（文化八寫）院藏人備亡（寬政六寫）をはじめこの職分に關する多くの記錄類がある又代々の日記、自傳にも見るものあり　宗順記には寬政二年本

居宣長が古事記傳初刷を妙法院眞仁法親王に獻じたことがありこれを取次いで便宜を計つたことが、宣長の來書などにも窺はれる。宗福の傳には弘化四年學習院の開講に當り、講筵に列して、その事情を詳かに記すところもある。なほ神社關係、近世文人の著作ならびに筆蹟等も數多く存せられてゐる。

七月卅日には市内聖護院頤頼美町木下伊平氏を訪ね、先代壺山氏蒐集に係る芭蕉以下近世俳人筆蹟を拜見した。芭蕉自畫賛以下見るべきものが多くあつた。又茶杓の蒐藏も夥しく、紹鷗利久、光悦等の所持と傳へられるものもあつた。

八月二日には市内柳馬場六角下ル饗庭長兵衛氏宅に團扇の數々を拜見した。同家は團扇商の老舗で、現に技術保存の指定をうけてゐる。家職としての團扇の蒐集は全國に亘つて餘すところがない。奈良、江戸、京の作品には各々趣きがあり、地方にも松平不昧公の好んだ出雲今市の製をはじめ備前撫川など好ましいものが多くあつた。

『東洋史研究』の新發足

昭和十年羽田博士指導の下に當時の本學史學科東洋史研究室員並びに附近在住有志を中心に發會、爾來會員相互の親睦を計ると共に年六回雜誌『東洋史研究』を刊行して本邦東洋史學の發達に寄與する所大であつた東洋史研究會では、時局下一段と會組織を强化して使命の達成を計るべく昨年來屢次協議の結果、新たに會長に總長羽田亨博士、副會長に教授那波利貞博士を推戴、別に總務委員に宮崎市定教授、編輯委員に安部・小川・田村・森・内田の諸氏、庶務委員に村上氏が就任し新發足を遂げると共に、雜誌「東洋史研究」の劃期的充實向上を期することゝなつた。處が偶々出版界の狀勢から若干の紆餘曲折があり、その實現が遲延してゐたが、今般主務官廳より國家目的に沿ふものとして認められ、その使命に鑑みこゝに改卷して從來の面目を改め、一段と内容を刷新充實して世の期待に副ふことゝなり、この新第一卷第一號が去る八月末發行された。

その主要目次左の如くである。

一、金代刑法考　仁井田　陞

一、元の諸帝の文學　吉川幸次郎

西洋史讀書會

例會　六月二十八日午後二時より第五回例會を原教授室にて開催。原教授、鈴木、井上兩助教授以下十三名出席。

一、宗教改革以前に於ける獨逸ヒューマニズムに就いて　植村雅彦氏

例會　七月十三日午後二時より第六回例會を原教授室にて開催原教授、鈴木助教授以下十一名出席。

一、國務卿ジョン・ヘイと共の時代　今津晃氏

例會　八月七日午後一時より第七回例會を原教授室にて開催。出席者は、原教授、鈴木助教授以下九名。

一、"Constitutio in favorem principum" の解説　兼岩正夫氏

考古學教室の近況

一　山城アンデラ山古墳の調査、洛南久世郡大久保村大字廣野小字丸山の丘陵上にあるアンデラ山と俗稱する古墳の上部に埴輪圓筒をはじめ異形の埴輪樹物の露出してゐることが、宇佐晋一氏に依つて教室に報ぜられて來たので、八月下旬から前後四回に亘り同氏の參加を得て、梅原教授、小林助手以下澄田・及川・岡田等の教室員がその調査を行ふた。この古墳は徑約百八十尺、高さ二十尺を超える大きな丸塚であつて、大正五六年の頃盜掘に罹りいま頂部の南半に凹所を見受けるが、右の調査の結果、北半の部分に六個の鰭のある埴輪圓筒が東西の一直線に並んで、それが兩端で南折してもと四角に頂部を繞つてゐた形迹をとゞめ、更にこの區劃内の北邊中央部に馭（矢筒）形埴輪と蓋形埴輪の遺存することが認められた。これは畿内に於ける埴輪に關し新たに知見を提供するものとして記すべきである。

二　考古學資料叢刊の續刊　第三集たる『唐鏡大觀』は圖版上下二册百二十葉の印刷を終へ、目下本文の印刷中である。この本文は總説と解説とから成つて四六倍版約二百頁の豫定であり、本年中に公刊の豫定になつてゐる。第四集たる『支那古玉』もまたほゞ圖版百三十葉の印刷が終り、引續いて刊行の筈で、目下第五集として梅原教授の手で『東亜に於ける漢代の明器殊に家屋と竈』の編纂中である。

三　近畿地方遺跡地名表並に文獻目錄編纂事業　昨秋以降日本學術振興會の援助を受けて本教室副手今井富士雄氏が梅原教授指導の下に從事してゐるこの事業は、上は石器時代から下は古寺跡に亘るあらゆる遺跡の正確なる地名表と分布圖の作製を主標となし、兼て關係の文獻目錄を作らうとするものであつて、本年五月以降新たに大學院學生及川幸夫氏が、實地の調査を擔當することになつて、目下鋭意進行中であり、京都府滋賀縣から近く大阪府に移る豫定になつてゐる。

四　故日名子太郎氏蒐集品の購入　大分縣の郷土史家として令名のあつた同氏の多年に亘る郷土を中心とした考古關係の蒐集資料は、その歿後遺族の下に保存せられてゐたが、今回遺稿『大分縣金石年表』下卷出版資金に當てられる爲に本教室で讓受けることになつて最近手續を終へた。遺品は石器時代から歴史時代に亘る五百餘點であつて、中で石器時代の遺品は單に大分縣のものばかりでなく、全國の遺品を含んでうちに注意すべきものがあり、また別に後藤碩田の遺愛の銅鏃等記すべき類に亘つてゐる。

（梅原）

會　報

史學研究會評議員會

七月十日（月曜）午後一時より陳列館貴賓室にて西田、那波、梅原、田村、井上各評議員、不破委員出席のもとに評議員會開催。梅原評議員より『史林』發行所變更に關する經緯の報告ありて

左記三件を協議決定せり。

一、從來『史林』を內外出版印刷株式會社にて發行し來りし所、今回の企業整備により同社は印刷部のみを存置することとなりし爲、今後は史學研究會が直接『史林』の經營主體となり、印刷のみを同社にて擔當すること。

一、史學研究會々費を昭和十九年度後半期より年額六圓とすること。

一、星野敬一氏に新たに史學研究會の庶務係を依囑すること。

◇會員動靜

◇入會

東京都八王子市横山町六〇　鮎澤信太郎氏（右三上正利氏紹介）

德島市上佐古町三丁目　岩淺敦俊氏（右那波利貞氏紹介）

◇寄贈交換圖書

史學雜誌	五五ノ四、五	史學會
日本文化研究第一輯		大阪商科大學日本文化研究室
社會經濟史學	一四ノ二、三、四	社會經濟史學會
京都市史 編年綱目第一卷		京都市
民族學研究 新二ノ二、三、四、五		民族學協會
文化	一一ノ六、七	東北帝大文學會
歷史學研究	一四ノ四	歷史學研究會
史迹と美術	一五ノ五	史迹・美術同攷會
國學院雜誌	五〇ノ四、五	國學院大學雜誌部
人類學雜誌	五九ノ六、七	日本人類學會
史學	二二ノ二、三	三田史學會
史淵	三二	九州史學會
東方學報	一五ノ一	東方文化學院
哲學研究	二九ノ五	京都哲學會
東洋史研究 新一ノ一		東洋史研究會
帝國學士院紀事	三ノ二	帝國學士院
考古學雜誌	三四ノ五	日本考古學會
國語・國文	一四ノ五	京都帝大國文學會